

クワにおけるカミキリ類の発生と仕立収穫との関係

寺本 敏・永井清文・宇都明光 (宮崎県総合農業試験場)

Satoshi TERAMOTO, Kiyofumi NAGAI and Akimitsu UTO: Relationship between the Infestation of Longicorn Beetles and Harvestable Methods of Mulberry

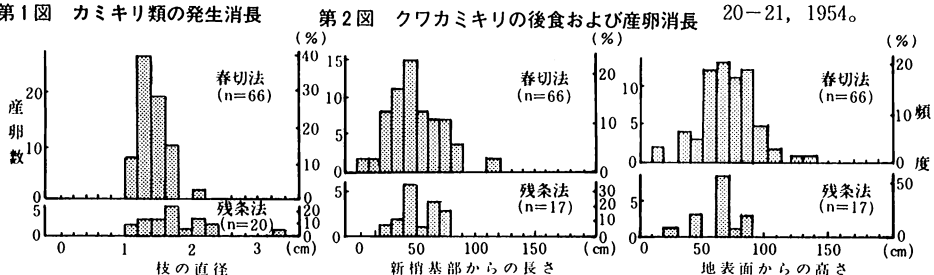
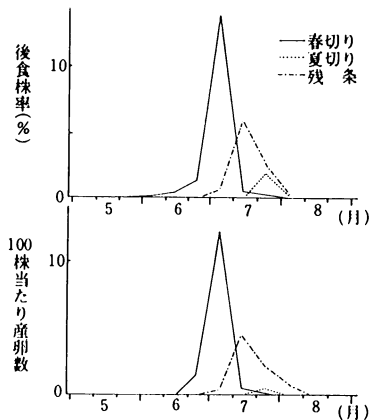
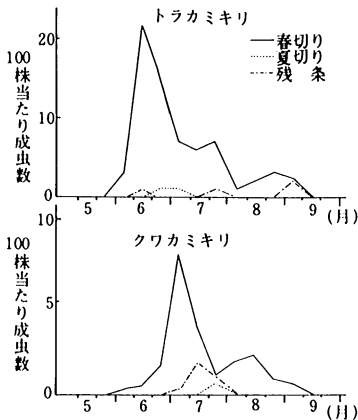
桑樹においてカミキリ類は重要なせん孔性害虫であり、本県ではクワカミキリおよびトラカミキリが認められ、また桑園での薬剤防除に限界があることから最も防除困難な害虫のひとつとされている。そこで1983年に本種の桑園における発生状況を調査し、仕立収穫法との関連性について検討したので結果の概要を報告する。

1. 試験方法

農試場内蚕業部の仕立収穫法の異なる桑園(春切・夏切・残条)において、5月から10月まで約10日間隔に園内を巡回し成虫の発生状況を調査した。なお発見した個体はすべて採取して持ち帰った。またクワカミキリに関しては後食および産卵状況についても同時に調査した。

2. 結果および考察

1) 成虫の発生消長 春切園ではクワカミキリおよびトラカミキリの両種が6月上旬から認められ、以後密度は急増しトラカミキリでは6月中旬、クワカミキリでは7月上旬にピークを示し発生がきわめて多かった。一方残条および夏切園でも両種の発生がみられたが明瞭なピークは認められず比較的低密度に経過した(第1図)。このように本県における成虫の発生消長は西日本で一般にみられる初夏最盛型であることが確かめられた。



第1表 クワカミキリの後食および産卵状況

区別	調査株数	後食株数	後食株率(%)	産卵株数	産卵株率(%)	産卵数	100株当たり産卵数
春切法	273	44	16.1	36	13.2	40	14.7
夏切法	310	6	1.9	1	0.3	1	0.3
残条法	271	25	9.2	13	4.8	21	7.7

2) クワカミキリの後食および産卵 クワカミキリは羽化し生殖細胞が成熟するまでの期間にいわゆる後食を行うが、本調査間隔の限りでは後食と産卵の各消長はきわめて類似しており、いずれも6月中旬～8月上旬にみられ特に7月上～中旬が多かった(第2図)。また後食された桑にはほとんど1～数個の産下卵が認められ、村上¹⁾の報告からも明らかのように産卵は春切法で最も多く夏切法では少いことが確認された(第1表)。クワカミキリの産卵は枝条の大小に関係すると古くから言われているが、本調査においても産下卵は枝条基部から20～80cmの直径1.0～1.8cmの部位に多くみられ1.0cm未満の枝条には全く認められなかった。

さらに収穫時の伐採位置との関連から産下卵の垂直分布を地表面からの高さにより調査した結果、50～90cmの範囲に集中していた(第3図)。

以上のような成虫の発生生態は桑の収穫時期の違いによる枝条の伸長状態と関係が深いようであり、発生が特に多い6～7月に新梢が最も伸長している春切園に集中して飛来・産卵するものと思われる。したがって春切園では特にこの期の防除対策が重要であるが、薬剤散布は蚕への影響が大きいため発生が抑制される夏切中心の収穫形式への転換が必要と考えられる。

引用文献

- 1) 村上佐佐男: 蚕糸研究, 10, 20-21, 1954。